

# レンツとビューヒナー

## — 批判者たちの肖像 —

菅 利 恵

**要旨：**1770年代に活躍した作家J. M. R. レンツと、1830年代の作家ビューヒナーの関係については、ビューヒナーがレンツをモデルにして書いた短編『レンツ』を起点にして語られることが多い。1778年初頭にレンツが精神錯乱の発作を起こした経緯を描いたこの短編の内容にそくして、精神錯乱の主題や二人の芸術観などが論じられてきた。しかし、そのように『レンツ』を両者の接点とするとき、搾取への批判的なまなざしという二人の決定的な共通項が見えにくくなってしまう。二人はともに農民と兵士の生に特別の関心を寄せていた。それは自由と平等の名のもとに人間性が高く掲げられた啓蒙の陰で、前近代的な搾取構造が長く残された社会階層である。ビューヒナーが農民に向けた扇動ビラ『ヘッセンの急使』において、また貧しい兵士を主人公とした劇作品『ヴォイツェク』において問題にしたのは、特定の人間が一方向的に物のように扱われ、搾取の対象に押し込められる構造である。そしてレンツもまた、同じ構造を見すえ続けた。本稿では、二人の人生行路や作品をかいつまんで素描しながら、両者のかかわりを『レンツ』ではなく彼らの問題意識の重なりから照らし出すことを試みる。レンツの小説『ツェルビーン』と小論「軍人の結婚について」、またビューヒナーの戯曲『ダントンの死』を中心に、それぞれの社会批判のありように光を当て、両者の共通性や違いを明らかにする。

初夏のモスクワの路上で、ヤーコプ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツ Jakob Michael Reinhold Lenz の遺体が発見されたのは1792年のことである。かつて——といってもそのほんの15年ほど前だったが——彼は啓蒙の杵を突き破る旗手としてもはやされたこともあった。ストラスブールで貴族の付き人をしていた1774年に、戯曲『家庭教師 *Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung*』を発表して大いに注目を集めた。短い間に戯曲や小説や翻訳、文学論などを次々と世に問うたが、その勢いは長く続かない。『森の隠者 *Der Waldbruder, ein Pendant zu Werthers Leiden*』などいくつもの作品が未完成のまま終わり、社会改革についての文書も、多くは発表されることも宛先に届くこともなかった。1792年の時点で彼の名前はドイツ語圏でほとんど忘れ去られていた。

レンツの転落のきっかけとなったのは、彼がストラスブールで知り合い、心の友と思い定めたヨハン・ヴォルフガング・ゲーテと仲違いをしたことである。1775年、すでに『若いヴェルターの悩み *Die Leiden des jungen Werthers*』(1774)で時の人となっていたゲーテは、ザクセン・アイゼナハ・ヴァイマル公国の若き公子に招かれ当地の宮廷で実務家としての一步をふみだす。陽のあたる道を意気揚々と進む友の背中を追いかけて、翌年レンツもヴァイマルにやってきたのだが、友の幸運を自分のものとすることはできなかった。ヴァイマルの宮廷になじまず、しばらく郊外に引きこもり、最終的にはゲーテからも宮廷からもきっぱりと拒絶される。その後、文学仲間やゲーテの妹夫婦の世話になりながら各地を転々としていたが、1778年のはじめに

統合失調症を発病した。

後になってゲーテは、レンツについて、無益な陰謀と自虐にとりつかれた変人だったと辛辣に語っている。ゲーテにとって、レンツは自意識をいびつに肥大化させた 1770 年代の若者たちの代表格で、才能を持ちながら調和的な落としどころを知らない中途半端な人間であり、一瞬だけ輝いて視界から消えた「彗星」のような存在であった。<sup>1</sup>

ゲーテとレンツのゆかりの地ストラスブールに、ゲオルク・ビューヒナーが足を踏み入れたのは 1831 年。長命だったゲーテが没し、古典主義文学の残光が失われる一年前のことである。留学生としてやってきたこの地で、ビューヒナーはかつてここで活躍した作家レンツにかんする資料を知る。それから数年後、政治活動に破れて再びこの地に滞在したときに、ビューヒナーは短編『レンツ *Lenz*』（1839 発表）を書くことになる。

ビューヒナーの人生はレンツよりも短かった。留学の後、農民にあてた扇動ビラを作って警察に追われ、1835 年フランスに亡命。その後 1836 年の秋に大学講師の職を得てチューリヒに移ったが、翌年初頭チフスに罹患。約一ヶ月の闘病ののち、2 月 19 日に 23 歳の若さで亡くなった。レンツと同じようにひとときだけの輝きを残して世を去り、その後同じように歴史に埋もれかけたわけだが、しかしビューヒナーは、埋もれたままにはならなかった。自然主義の水脈からラディカルな社会批判の文学が始まり、さらに前衛的な表現主義の時代を迎えると、ビューヒナーは時代を先取りした稀有な才能として高く評価されるようになる。現在は 19 世紀ドイツ語圏文学を代表する作家と見なされており、その名はドイツにおける最も重要な文学賞に冠されている。

死後とはいえ不動の名声を与えられたビューヒナーが『レンツ』を書き、レンツの名を詩的な小説世界に呼び戻していたことは、レンツという作家の存在感に少なからぬ貢献をしている。短編『レンツ』はさまざまな創作にインスピレーションを与え、なによりも、この小説のおかげでレンツの名が陽のあたる場所に刻まれることになった。ドイツ語圏の文学になじみのある人ならば、レンツの作品は知らなくともビューヒナーの『レンツ』を知っていることは多いだろう。

ビューヒナーの『レンツ』は、1778 年初頭ヴァルダースバッハの牧師オーバーリーンのもとに滞在していたレンツが、精神錯乱の発作を起こした経緯を描いている。オーバーリーンは 1 月 20 日から 2 月 8 日までのレンツ滞在を記録に残しており、ビューヒナーは留学時代にこの記録にふれたのだ。発病の記録にただならぬ関心を抱いて詩的創作の対象としたことから、レンツがビューヒナーに強い印象をあたえたのは、なによりも孤独に錯乱したその転落のありようだったと思われる。ビューヒナー自身、留学を終えて故郷に戻ったときに深刻な精神的危機を経験していた。また『レンツ』では主人公の文学観に作者の芸術観が投影されてもいて、ビューヒナーがレンツを、自身と文学的姿勢を共有する作家とみなしていたこともうかがえる。<sup>2</sup> あるべき姿よりも「あるがまま」を抉り出して描こうとする傾向、また短い断片的な場面をたたみかけるようにつなげる手法においても、ビューヒナーの劇作品にはレンツのそれと重なる部分が確かにある。

もうひとつ、両者には明白とっていい重なりがあった。それは二人の目がともに、搾取され踏みにじられる人々にひきつけられたということだ。彼らはともに、農民と兵士の生に特別の関心を寄せていた。啓蒙の理念が広められた時代の陰で、それは前近代的な搾取構造が長く残され続けた社会階層である。ビューヒナーが農民に向けた扇動ビラ『ヘッセンの急使 *Der*

『Hessische Landbote』(1834)において、また貧しい兵士を主人公とした劇作品『ヴォイツェク Woyzeck』(1875 発表)において問題にしたのは、特定の社会階層にある人間が一方的に物のように扱われ、搾取の対象に押し込められる構造である。そしてレンツもまた同じ構造を見すえ続けた。

レンツとビューヒナーの関係は、当然のことながらふつつ短編『レンツ』を起点にしてとらえられる。この短編の内容にそくして、精神錯乱の主題や二人の芸術観などが論じられてきた。ただ、そのように『レンツ』を両者の接点とするとき、搾取への批判的なまなざしという二人の決定的な共通項が見えにくくなってしまう。本稿で試みたいのは、二人の人生行路や作品をかいつまんで素描しながら、両者のかかわりを『レンツ』ではなく彼らの問題意識の重なりから照らし出すことである。それぞれの社会批判のありように光を当てながら、両者の共通性や違いを浮かび上がらせてみたい。

## 1. レンツと農民

レンツが生まれたのは北ドイツのリーフランド、現在のラトヴィアである。中世にドイツ騎士団の東方植民が始まって以降、この地はドイツ人に実質的に支配されていたが、近世はロシア、ポーランド、スウェーデンの覇権争いの戦場となった。1700 年から 20 年にわたる北欧戦争の中でロシアに占領され、その後ロシア帝国の支配下に置かれる。牧師のポストを求めて北ドイツから移住してきたレンツの父親は、この地で 1744 年に結婚、1751 年に 4 番目の子どもとしてレンツが生まれた。

戦争とペストで荒廃したリーフランドには土着のラトヴィア人が住んでいたが、支配者層はドイツ語圏からの移住者とその子孫だった。ドイツ人が屋敷と農地を所有し、地方貴族として行政の実権を握る一方、ラトヴィア人は農奴として彼らのために働き、屋敷を建て農地を耕した。農民を領主の所有物とみなしてその土地に拘束する農奴制は、近世に入ると自作農民に徐々に移行していったが、その速度には地域差が大きく、リーフランドではロシアの支配下に入ってから逆に農奴の状況が悪化した。農奴は土地や家畜と同じように売り買いの対象で、無制限の体罰が認められ、苦情の権利もなかった。<sup>3</sup> 18 世紀を通して体罰権の制限などの改革も進むが、この地で農奴制がなくなるのは 1820 年になってのことである。

レンツは、教会や父の仕事にともなう地域住民との交流の中で、また日々の暮らしの中で、隷属して生きることを強いられた人々の実態を目のあたりにしていた。<sup>4</sup> 封建的な暴力が色濃く残る地において、特定の階層の人々が殴られ、物のように売り買いされるさまを日常的に目にしていた経験は、社会の搾取構造に対するその独特の敏感さにつながっているように思われる。

この敏感さの一端を、まずは彼の描く農民像から見ておこう。彼の劇作品や小説の中で、農民は、ほんの脇役でありながらも、主人公の輪郭に陰影を与える決定的な役割を果たしている。主人公はたいてい、教養を積みながらも知識をいかせる就職先が見つからない、ふがいのない若い市民男性。『家庭教師』をはじめ『軍人たち *Die Soldaten*』(1776) や『哲学者は友達によって作られる *Die Freunde machen den Philosophen*』(1776)、『ツェルビン *Zerbin oder die neuere Philosophie*』(1776) と、レンツは社会的な力を持たない市民層知識人を繰り返し描いた。その背景にはもちろん、当時のドイツ語圏の閉塞状況がある。まだドイツという国も形作られてい

ない時代だった。大小さまざまの領邦が分裂したまま各々の利害を主張してひしめきあう「神聖ローマ帝国」の末期で、小さな領邦では官僚機構が発達していないところも多かった。そんな時代にあって市民知識層の政治的、経済的な活躍の場は限られており、レンツが描く若者像には、当時の市民知識層の——そしてまた彼自身の——行き場のなさがすくい取られている。力のない知識人が、自らの学識と能力をいかすことのできる居場所を求めてさまよう、というのがレンツの作品世界の基本的な図式である。そして迷いさすらう主人公の視界にふと入り込み、その心をかき乱すのが、彼らと異なる論理で生きているようにみえる農民たちだった。

『家庭教師』には、大学を出たものの職が見つからず、貴族の館の家庭教師となった男が登場する。貴族にこき使われて暮らす生活のはけ口のように、彼は教え子の少女と関係を持つのだが、彼女が妊娠してしまうと慌てて館を逃げ出す。その後、自分の愚かさで罪を悔いて去勢までして鬱々としていたが、あるとき村の農民の少女に心を奪われて唐突に結婚を決める。

若い知識人が焦りと自己否定をくぐりぬけた先におかれたこの農民の少女のエピソードには、レンツの作品における農民像の特徴がよく示されている。一方で農民は、当時の知識層がもてはやした新しい自然、すなわち文明批判に裏打ちされたルソー的な自然を垣間見せてくれる、またとない媒体であった。それは傷つけられた不遇な市民男性に、過酷な現実とは別の可能性を予感させる希望の光なのだ。ルソー的な文明批判、そしてこれに後押しされた素朴な自然の賛歌は、当時多くの若者が夢中になったゲーテの『ヴェルター』の特徴でもある。美しい田園の自然を背景に繰り広げられるこの主人公の恋模様には、しきたりや教養に曇らされていない自然のうちにこそ純粋な愛があるという価値意識が組み込まれている。『ヴェルター』の熱心な読者だったレンツもまた、同じ文明批判のまなざしを確かに共有していたのだった。

その一方でレンツのテキストに特徴的なのは、そうしたまなざし自体の身勝手さとひとりよがり、ためらいなく暴き出されてもいることだ。『家庭教師』の農民の少女は、生き生きと魅力的な「自然」として登場する一方で、考えの足らない部分が強調されており、無垢というよりは無知な少女として描かれてもいる。このように、農民に理想化された「自然」をただ投影するのではなく、あえてこれにおさまらない部分を強調するということは、レンツが郊外に引きこもっていたときに書かれた書簡体小説『森の隠者』にも見られる。ここではルソー的な自然への憧れから村の農民たちとの交流を試みた主人公が、農民たちから馬鹿にされ、さらになけなしの持ち金を盗まれるのだ。こうした農民像を通して、勝手に「自然」に憧れる男たちの哀れな滑稽さが浮き彫りにされるのである。レンツがヴァイマルに来る直前に書いた短編小説『ツェルビーン』では、ひとりの農民の娘がきわめて感傷的に理想化された像を与えられている。特徴的なのは、この作品の終盤に、彼女と家族とのやりとりが長々と差し挟まれていることだ。それまで市民ツェルビーンの転落を淡々と伝えてきた語りが、中断され、ひとりの農民の少女の人生が突如前景に出される。他の部分とは明らかに語り口の異なる家庭劇風の場面を通して、「市民の不遇」という本筋の物語からは決して見えてこない、農民の少女の文化的な背景が読む者の前に開示されてゆく。つまりここには、市民知識層の一方的なイメージには回収されない、少女の他者としての顔が念入りに書き込まれているのだ。それによって、勝手な理想を膨らませた市民男性の愚かしさと罪深さがあぶり出されている。

短編『ツェルビーン』は、さまよい傷ついたひとりの市民が、農民の娘に癒しを求め、結局彼女をエゴイズムの犠牲にするという内容である。主人公の悔恨と自死を通して、搾取に加担した罪の意識が切々と表現されてゆく。このように農民との関係をめぐってやましさと罪の意



識がしばしば色濃く表現されるということも、レンツの言説に顕著な特徴であろう。勝手な思い込みから特定の対象をことさらに理想化するというのは、イメージの篡奪であり、一種の搾取である。レンツにおいては、市民知識層と「自然」の間にひそむ搾取構造が明確に認識されており、だからこそ、ぬぐいがたいやましさと自己批判が「自然」の美化と同居しているのだ。断片として残された彼の戯曲『名も無い人々 *Die Kleinen*』には、「みなが踏みつけにする名も無い美德」を研究するためにさすらいの旅に出た貴族の若者が登場する。農民らに向ける彼のまなざしには多分にひとりよがりな理想が込められているが、このまなざしの裏には、名も無い弱い身分の人を踏みつけにして気づきもしない「偉大な男たち」への反発がある。<sup>5</sup>「君らの生を成り立たせてくれたのは誰だ？彼らではないのか？」レンツにおいて、農民に向けられた文明批判的な視線は、搾取の罪の自覚と隣り合わせなのである。

## 2. レンツと兵士

先に書いたように、搾取構造に対するレンツの敏感さには、おそらく彼の故郷での経験が関係していた。さらにそれだけではなく、ストラスブール時代の彼が格差の底辺にいたことも、その重要な背景であろう。フランス領ストラスブールに来る前、彼は1768年から2年半の間ケーニヒスベルクで学んでいた。カントの講義に通い、読書や詩作にはげんで学生生活を謳歌していたが、仕送りを続ける余裕のなかった父親は彼に帰郷を言い渡す。だが知的な営みの楽しさを知ったレンツにとって父の命令は受け入れ難いものであり、1771年のはじめに彼は父に無断で新しい道を歩き始める。同じ北欧出身の男爵兄弟が、ストラスブールで将校としてのキャリアをはじめようとしていた。レンツはその同伴者となり、東のケーニヒスベルクから西のストラスブールへとはるばる移動したのである。その後、4年近くレンツは彼らの付き人として暮らした。寝食は保証されても給金は出ない。男爵兄弟にとって、学があり複数の言語で手紙を書くことのできるレンツは、便利な雑用係というだけでなく、自身の社会的地位を人にひけらかすことができるステータス・シンボルでもあった。レンツは、身分差がもたらす搾取構造を身をもって味わったのである。

他人に隷属して生きることの苦痛と屈辱は、ひとつの恋愛事件を通して決定的なものとなる。戯曲『軍人たち』を生んだこの恋愛事件は、短編『ツェルビーン』の前半部分に語られた四角関係とも深くかかわっているため、少し詳しく紹介しておこう。

スザンナ・クレオフェ・フィービッヒは、裕福な市民の娘。金細工師の父親は宝石屋を構えていて、そこに、貴族をはじめとする裕福な顧客が出入りしていた。クライスト男爵兄弟の兄もそのひとりで、やがて彼はクレオフェと親密になる。ストラスブールは軍人の多い街だった。赴任中の貴族の将校が市民の娘を誘惑していつきの恋を楽しみ、なんの責任もとらずに故郷に戻ってゆくというのはめずらしいことではなく、フィービッヒ家の父親は、そんな事態を避けるために自衛を試みる。1773年10月、フィービッヒ家とクライスト男爵長男の間で正式な契約がかわされた。その内容は、彼が故郷の両親の許可をとり、一定期間のうちにクレオフェと結婚すること、もしも結婚の約束が果たされない場合は補償金を支払うことを確約したものであった。

1774年の初夏、男爵は結婚の許可を得るために故郷クールラントへ出発。彼からクレオフェについて気にかけるよう言い渡されていたレンツは、その後もフィービッヒ家に出入りを続け

た。恋人を待つクレオフェは退屈しのぎにレンツにかまい、軽口をたたく。そうするうちにレンツは、まるで魔法にかけられたように、自分の主人の婚約者に恋をしてしまった。レンツにとってクレオフェのふるまいは思わせぶりで、さらに彼女が婚約者の弟と接近していることも気にかかる。ほどなくしてレンツは、入り組んだ感情のもつれから自分を引き離した。男爵兄弟との契約を解消し、筆一本で自活する道を探り始めるのである。

レンツにかんして言うならば、この事件が残したのは決してただ辛い思い出ばかりではなかった。彼は自らの体験をもとに戯曲『軍人たち』と短編小説『ツェルビーン』を生み出したのだから。だが、クレオフェには苦い現実だけが待っていた。クライスト男爵は音信不通となる。役場に保管された契約書も、圧倒的な身分差を前になんの力もなかった。結婚の約束は果たされず、補償金が支払われることもなかった。

格差社会を背景にして繰り広げられる、強いものが弱いものを食い物にする悪趣味なゲームを、レンツは戯曲『軍人たち』の中であますところなく描き出している。『家庭教師』とならぶレンツの代表作となったこの戯曲には、シュトルツィウスという市民男性が登場する。彼は婚約者だったヒロインの少女を貴族の将校に奪われ、彼女が貴族のエゴイズムの犠牲になって、もこれをとめることができない。その鬱屈とした姿を通して、格差の底辺に置かれた者の苦痛と屈辱が切実に表現されている。さらにここでは、人を食い物にすることで力を誇示するその場のゲームが、ゲームの賭け金として男たちを翻弄するかに見えた少女にこそ、誰よりも悲惨な結果をもたらすことも明らかにされている。酷薄なゲームの中で、最も残酷な暴力を受けるのは、身分とジェンダー秩序の最底辺にある者なのだ。この構造は、先に注目した短編『ツェルビーン』でも的確に暴きだされている。主人公ツェルビーンは、ストラスプールの時代のレンツと同じく、学はあれども社会的地位を持たない、無力な貴族の付き人。その彼が、美しい市民女性を主人と奪い合うかたちになり、嫉妬とかなわぬ思いに翻弄されて自分を擦り減らす。レンツと同じように彼もまた、玉の輿を夢見る市民女性に相手にされない苦しみを、痛いほどに味わうのだ。そのように身分格差の構造に苦しめられる一方で、彼は物語の後半ではひとりの農民の娘に自分のエゴイズムを押し付け、結局彼女を破滅させることになる。貴族との関係性においては搾取される側だが、より立場の弱い者との間では搾取する側となる——そのような市民知識層のあり方を鋭くとらえたこの作品は、小品ながら、レンツという作家の独自性をよく伝えるものとなっている。

### 3. レンツにおける社会改革の試みとその挫折

レンツは、人間関係に巣食う暴力性がもたらす傷を文学的に昇華させただけではなかった。社会の構造的な矛盾に思いをめぐらせ、これを乗り越えるための具体的な手立てを思索してもいたのである。彼が問題としたのは、搾取のゲームに興じて日々の鬱憤をはらさねばならないような、兵士たちの状況についてであった。

将校としてキャリアを積もうとしていた男爵に付き従う中で、レンツは兵士たちの暮らしぶりを間近に見、兵士という存在形態への問題意識を強めていった。故郷にいたころからすでに軍事には興味を持っていたようだが、兵士たちの生活の問題に目が開かれたのは、ストラスプールに移ってからである。レンツが兵士たちに見たのは、「国家の囚人のようにあつかわれている」「不幸な人間たちの群れ」(794f) <sup>6</sup> であった。

先に述べたように、1774年の秋にレンツは男爵兄弟との契約を解消した。しかしほどなくして日々の暮らしをまかなえなくなる。文筆家として食べることは難しく、借金が膨らみ、深刻な貧困状態に追い詰められていった。<sup>7</sup> 1776年3月の終わりに、彼は一念発起してヴァイマルの宮廷に向かうが、これは八方塞がりの状況をなんとかして打開するためであった。このとき彼は「軍人の結婚について *Über die Soldatenehen*」という小論文を持ってゆく。届け先はヴァイマル宮廷のカール・アウグスト公。文章の中では「王様方」が呼びかけの対象となっている。「私たちと同じように人間」である「王様方」に、兵士の置かれた状況について「あなたたちが見るのを怠ってきたこと、そして私たちが感じてきたこと」を、ひとりの知識人として訴えかけようとする内容であった。(789)

この文章で主張されているのは、まずもって兵士を「機械」のようにあつかうのをやめるべきということだ。彼によれば、歴史の中で「兵士は王侯の思いつきや大臣の情欲の道具」(789)となってきた。しかし「戦術の師」は本来、「常に人間をたんなる機械としてではなく、人間として勘定すべき」(791)である。兵士は「祖国の守り手」にはほかならないが、その大事な役目を果たすためには職務への「情熱を吹き込まれていなくては」ならず、「自分が金で雇われたということを忘れていなくてはならない」。(792) そのためには兵士は、物のようではなく意志と感情を持った人間としてあつかわれなければならないという。

意志を持った人間としての兵士、とはどういうことだろうか。レンツによれば、それはつまり彼らが誰のためでもなく自分のために、自らの自由な意志と心で祖国防衛にたずさわることである。これを可能にするために、レンツは次の2点を提案する。1点は、軍隊は攻撃よりも防衛に主眼を置くべきだということ。兵士が前向きに戦闘に向かうためには、これがあくまでも「防衛」であり「隣人の苦しみの種」ではないという前提が必要である。(792) もう1点は、人間らしい生を奪われた兵士の状況を改善すること。レンツにとって、人間としての「罪のない喜び」(795)のすべてが禁じられている現状は認めがたいものであった。

2点目にかんしてレンツが注目したのが、兵士の結婚である。レンツは言う。現状においては兵士も将校も、制約の多い集団生活を強いられ、結婚を禁じられている。ほかに楽しみの機会を与えられていないから、彼らは女性と遊んでうさを晴らし、酒を飲み、その場限りの放蕩にうつつをぬかして任務への体力も情熱も残らない。戦いが、誰のものでもなく兵士自身のためのものとなるためには、兵士は自分で守りたいと思える家族を持たねばならない。レンツは「王様方」にこう訴える。「妻や子どもらのために戦うならば、あなたの兵士たちのうちに、どれほど奇跡的な力が湧き上がることでしょう。」(798)

社会改革にたずさわろうとするときに、なによりもまず「王様方」の問題関心をうながそうとしたレンツのもくろみは、それ自体きわめて18世紀的な文脈に棹さしている。先に書いたように、数多くの領邦が分裂したままひしめきあっていた時代において、市民知識層が社会制度の企画に参与する道はまったく整っていなかった。閉塞的な状況の中で、まことしやかに夢想されていたのが、学識と文芸の力で支配者層に影響をおよぼす、ということである。プロイセンのフリードリヒ大王をはじめとする啓蒙君主がもてはやされた時代でもあり、啓蒙された支配者こそが社会を前進させるという期待が残っていた。実際王侯の側も優れた知識人を側に置きたがった。18世紀後半に活躍し、レンツともいくつかのエピソードを残したクリストフ・マルティン・ヴィーラントは、専制君主と哲学者の関係を皮肉まじりに描いた『黄金の鏡 *Der goldne Spiegel oder die Könige von Scheschian*』(1772)を発表し、これがヴァイマル公妃の

目にとまってヴァイマルの宮廷に入った。ゲーテもまた『若いヴェルターの悩み』を書いた若き天才として、ヴァイマルに招かれたのだった。レンツがヴァイマルの宮廷に「軍人の結婚について」をたずさえていったのは、なによりも、自身の政治的思考能力を売り込むためである。<sup>8</sup> 政治的な論文で「王様方」の関心をひくことができれば、友人ゲーテがつかんだチャンスをも自分のものにすることもできるかもしれない——レンツがそう考えてもまったくおかしくはない歴史的な文脈が確かに存在していた。

「軍人の結婚について」の中で、レンツは問題の所在と原因を的確に示し、その解決策を論理的に提案している。それは今の目から見て決して荒唐無稽なものではなく、祖国防衛の自意識を持つ市民兵の登場という歴史的な変化を、先取りする内容ともなっている。<sup>9</sup> ただ、啓蒙君主に頼ることを前提とした彼の文章のうちに、致命的な自己矛盾が生じていることも見落としてはならないだろう。支配者の心に届けるためには、現状改善がほかならぬ支配者の利益になることを語らねばならない。だからレンツの改革案は、兵士の人間らしい生の回復を目指しながらも、人間性の救済ではなく支配者側の利益、つまり「その方が合理的で経済的」というレトリックを前面に出す形となっている。レンツは具体的な数字を出し、支出額をシュミレーションして、自らの案の経済的な利点を強調する。そうして戦略的なものが強調される中で、いつのまにか兵士たちは、人間というよりもただの戦略的な操作の対象として強調されてゆく。議論の出発点は確かに、兵士を人間としてあつかわねばならないということだったのに、それがいつのまにか、彼らの情念をより効率的に動員するという話になってゆくのだ。兵士に結婚を認めることは、なによりも、意欲的な兵士を生む点で「合理的」なのだった。いつ死ぬかわからない兵士と娘を結婚させる父親は少ないかもしれない。だから、とレンツは提案する。だれであれ、その娘が将校や兵士と結婚した場合は税金を免除してはどうか、と。結婚から生まれた子どもの養育には国家が責任を持ち、未来の兵士として育てればよいのではないか、と。(799) このような提案において、兵士の子どもたちは自由意志の主体としてはとらえられていない。また、娘の選択も基本的に父親の意思に従属するものとみなされている。<sup>10</sup> 「機械」ではなく固有の意志を持つ存在としての人間、というレンツの出発点は、そのレトリックの中で結果的に否定されてしまうのである。

搾取される者の悲惨を、搾取する側の目線で解消しようとしたレンツのもくろみには、おそらく最初から無理があった。いずれにせよ、啓蒙君主をあてにしたレンツの社会改革案が実を結ぶことはなかった。ヴァイマルの宮廷に到着したレンツは、自分の社会改革案をゲーテらに見せる。けれども、とんでもない代物だと全力で否定され、宮廷に出す計画は潰されてしまった。<sup>11</sup> それでもレンツはあきらめず、ベルカに引きこもった後も、フランスに持ち込むことを意識して論文の書き直しを進めていた。しかしほどなくしてヴァイマルを去らねばならなくなり、結局論文は未完成に終わる。「王様方」に宛てられた文書は、結局ひとりの「王様」の目にも入らなかったのである。

1776年12月1日、レンツはヴァイマルを追放される。11月の終わりに詳細不明の騒動を起こして、ゲーテを完全に怒らせた上でのことである。その後1778年の初頭に牧師オーバーリーンのもとで精神錯乱の発作を起こし、発作を繰り返して1779年に父親のもとへと連れ戻された。

帰路の船上で正気を取り戻したレンツが、かつてのように注目を集めることは二度となかった。父のもとに帰っても、相変わらず居場所は見つからなかった。ロシアまでおもむき、1781



年秋からはモスクワで暮らす。ドイツ語圏のかつての文学仲間たちからは完全に見放されたが、ロシアの地でカラムジンら若い知識人たちと知り合い、交友関係を育んだ。詩作や翻訳、社会改革の構想なども最後まで粘り強く続けていた。

#### 4. ビューヒナーにおける社会改革

レンツの時代の知識人にとってまだ夢物語ではなかった啓蒙君主の理想は、その後、フランス革命とナポレオン戦争を経るうちに跡形もなく消え失せることになる。レンツが世を去った1792年は、フランス革命の火種がヨーロッパに広がり始めた年であった。革命への干渉戦争がはじまり、その後ナポレオンが台頭してヨーロッパは激動の時代に突入。1806年、すでに内実を失っていた神聖ローマ帝国があっけなく瓦解し、ドイツ語圏は抜本的な再編を迫られた。戦争の時代が続いて、1814年にナポレオン失脚。ドイツ連邦が発足し、ドイツ語圏は全体として揺り戻しの時代を迎える。メッテルニヒの反動的な体制が始まり、ロシア、オーストリア、プロイセンの神聖同盟が結成された。そのように反動的な体制が強められた中でも、一度成し遂げられた国王の斬首は、歴史の歩みを規定せずにはおかない象徴的な力を持っていた。揺り戻しの力が強く働いたドイツ語圏においても、歴史を無視する不当な支配者たちに反旗を翻そうとする勢力が、各地に確かに息づいていた。

ビューヒナーが生まれたのは1813年。ナポレオンに対抗する解放戦争が激しさを増した時期である。革新への夢と揺り戻しが強くせめぎあった時代において、ビューヒナーは、早くから社会体制の根本的な変革に関心を抱いていた。父親は穏健な医者だったが、フランス革命に共鳴しており、一家にはヨハン・コンラート・フリードリヒの「われらの時代」という現代史の一般向け小冊子シリーズがあってこれを皆で読んでいたという。1830年7月、パリで革命勃発。このころギムナジウムに通っていたビューヒナーは、のちに共に活動することになる学友ミニグローデと、「ボンジュール、シトワイアン！」と声をかけあうほどに革命に傾倒していた。まだ7月革命の喧騒冷めやらぬ1831年、彼はストラスブールに留学する。フランスでは人権や平等をラディカルに追求する「人権協会」が勢力をのばしており、その活動にビューヒナーもなんらかのかたちで参加したとされる。

1834年1月、留学を終えて帰国していたビューヒナーは、ストラスブールの下宿で密かに愛を育んだ恋人のミンナ・イエーグリにあてて「革命の歴史を研究している」ことを書いた。<sup>12</sup> 同じ頃、非合法パンフレットの作成などの反政府活動をしていた牧師ヴァイディヒと知り合っている。1834年3月、彼はヴァイディヒと扇動ビラの作成に取り組み、『ヘッセンの急使』の草案を書き上げた。同年4月、フランス「人権協会」の活動手法や方針を受け継いだ「人権協会」支部をダルムシュタットに設立。さらにギーセンにも同様の組織を立ち上げた。

社会改革の文脈におけるレンツとビューヒナーの決定的な違いは、ビューヒナーの場合、啓蒙君主の観念につながるものがどこにも見当たらないことだ。レンツの生きた時代から半世紀、革命と戦争を経て改革をもくろむ市民知識層の自己認識は確実に変化していた。支配者を導きつつその力をあてにするような思考回路はビューヒナーにはない。彼にとって、理不尽に踏みつけられた人々は、なんらかの社会改革によって救済すべき存在というよりも、改革をになうべき当の主体だった。「人権協会」の方法論に導かれたその考えによると、支配体制の刷新を可能にするのは民衆の蜂起のみであり、この蜂起をうながすために、秘密組織を各地に浸

透させること、そしてピラを撒き言葉の力で民衆の心に火をつけることが重要なのだった。『ヘッセンの急使』は、メッセージが宛先の心にすみやかに届くよう、理不尽を告発するまっすぐな言葉で書かれている。

上流階級の暮らしは長い日曜日だ。やつらはきれいな屋敷に住み、優美に着飾り、お上品な顔で特別な言葉をしゃべっている。その前で人民は、畑の肥やしみたいにうずくまっている。(54) <sup>13</sup>

レンツと同じように、ビューヒナーもまた自らの政治的提言に数を多く織り込んだ。しかしそれは効率を語って支配者層の利害関心に訴えるためではない。具体的な数字は、農民の利害関心を引き出すためにこそあった。

ヘッセン大公国には71万8373の住民がいて、みなで毎年約636万3364グルデンを国家に払っている。内訳は以下のとおり。(…)この金は、人民の肉体からしばらくとった血税だ。この金のために約70万の人々が汗を流し、うめき、飢えている。国家の名においてゆすり取られている。(54)

人民はやつらにとって家畜の群れにすぎない。やつらは見張り番で乳搾り、そして皮剥人である。(55)

『ヘッセンの急使』はアジテーションの文書であり、レンツの「軍人の結婚」との違いは明らかである。知識人の言葉の力で社会改革を目指す、という大きな枠組みこそ共通しているものの、改革の手法にはフランス革命をくぐり抜けた歴史の経過が如実に反映されている。抑圧する側の説得という迂回を深く削ぎ落としたその言葉は、強く迷いなく、直線的な響きが特徴的である。

## 5. ビューヒナーにおける社会改革の挫折

ただ、注意せねばならないのは、ビューヒナー自身が直線的な革命の主体であり続けたわけでは決してなかった、ということである。『急使』の言葉がもくろみどおりまっすぐに宛先に届いたわけでもない。レンツの場合、その改革案は誰からもまともに取り合ってもらえなかったが、ビューヒナーの文書は警察権力に目をつけられ、その危機感に火をつけてしまう。ヴァイディヒの協力で完成した『ヘッセンの急使』は、ヘッセンの反政府勢力のネットワークに拡散されて農民たちに広く届けられる予定であった。しかし文書が刷りあがるとまもなく、密告によって同志ミニゲローデが逮捕される。執筆者として特定されたビューヒナーも家宅捜索を受けた。『急使』の拡散は密かに進められたが、捜査網も強化され、逮捕の恐怖に脅かされる日々が続いた。翌1835年3月、ビューヒナーは亡命を決行する。

亡命によって彼自身はからくも警察の追求を逃れたが、逃れられなかった仲間のその後は悲惨であった。同年4月にヴァイディヒが逮捕される。獄中で痛めつけられた挙句、1837年2月21日に死亡。ビューヒナーがチューリヒで病死した二日後のことである。同じ年にミニゲローデが釈放されている。過酷な獄中生活のために、肉体的にも精神的にも異常がみられるよ

うになったからであった。

社会改革の試みにおいてビューヒナーが味わった挫折は、レンツの場合とまったく違うものだった。それは仲間たちの血と痛みをともなう、冷たく動かしがたい挫折であった。1835年、亡命先のストラスブールから家族にあてた手紙の中で、彼は繰り返し獄中のミニゲローデを案じ、拷問されているという噂に「考えられない」(408)と動揺している。弟ヴィルヘルムにはこうも書いている。「半年くらい前から、僕は確信している。動いてはならない。この状況で自己犠牲を選ぶ人間は、命をみすみす危険にさらす愚か者みたいなものだ。」(402)

虐げられた者たちに向けられたビューヒナーの言葉は、それ自体強く迷いのないものだったが、この言葉の力を屈託無く信じるというのは、あまりにも困難であった。それは、現実における運動の挫折のせいだけでもない。もっと前の、フランス革命の歴史を調べ始めた頃に、彼はミンナにこう書いている。

革命の歴史を調べてみて、歴史のぞっとするような運命論に打ちのめされた気持ちになっている。わかったのは、人間の本性のうちに恐ろしいほどに変わらないものがあるということ。人間どうしの関係には逃れ難く働く力があって、それはみなに与えられていると同時に、誰にも与えられていない。ひとりひとりのはただの波間のあぶくにすぎない。偉大な巨人なんてのもほんの偶然の産物で、天才の覇権も人形芝居と一緒だ。鉄の法則と滑稽にも取っ組み合いをしている。人間は、こういうことを知るだけでせいっぱいで、制御するなどできない相談なんだ。(377)

知識と言葉で歴史を導くなど夢物語で、世直しの行動も歴史の前には虚しい「人形芝居」——そんな想念に、彼はすでに変革の実践の前からなじんでもいたのである。

確認しておきたいのは、そのような想念が決して彼だけのものではなかったということだ。ビューヒナーの心をとらえたフランス革命は、知識人の言葉の力がまさに華々しく開花した事例である。ロベスピエールやダントンら、弁護士を中心とする知識層が政治活動を組織し、ジャーナリズムを駆使してルソーらの理念を民衆に届け、世の流れを大きく動かした。けれども周知の通り、それは激烈な痛みをともなう道のりでもあった。革命家たちの言葉は結果的におびただしい流血をもたらしたのである。問題は、流された血をどう考えるかということであった。

ビューヒナーは『ダントンの死』を発表した後、カール・グツコーの戯作でヴィクトル・ユゴーの戯曲を翻訳しているが、<sup>14</sup> そのユゴーの『レ・ミゼラブル *Les Misérables*』(1862)には、人道主義を体現する司教に影響を与えた人物のものとして次のような言葉がある。「何と言われようとも、フランス大革命はキリスト降誕以来、人類の最も力強い一歩です。不完全ではあったでしょう、しかし荘厳なものでした。」「その憤怒は未来によって許さるでしょう。その結果はよりよき世界です。」<sup>15</sup> ここでは革命の悲慘と流血が、理想主義的な未来への一歩として確かに位置付けられている。

しかしそもそもドイツ語圏にあって、フランス革命は、理想的未来への道のりの上に迷いなく位置付けうるものでは必ずしもなかったのだ。革命の炎は結果的に神聖ローマ帝国を再起不能なまでに焼き尽くし、ドイツ語圏に混乱の極みをもたらしたのである。もちろん革命の理想は抗いがたい魅惑であり、ドイツの地でも人々の思考に消しがたい刻印を残した。その一方で、

革命が生んだ悲慘もすみやかに伝えられており、衝撃をもって受けとめられていた。なによりも、市民知識層が政治な力を持たないドイツ語圏において、革命の「力強い一歩」はあまりにも遠かったのである。レンツの生と作品から容易に想像がつくように、フランス革命前後のドイツ語圏では、市民知識層の存在感がフランスとはまったく異なる。啓蒙君主が虚しくあてにされる状況で、ロベスピエールのように民衆の利害に寄り添い、異なる階級を束ねて導く強い指導者が登場する余地はなかった。19世紀に入っても、知識人が民衆を率いて変革に導くという図式が容易に成立しなかったことは、なんとか届けられたビューヒナーのビラが、農民たちによって読まれもせずにそのまま警察に渡されていたというエピソードからも明らかである。

旧式の権力がほころびをぶざまに晒したまま延命をはかり、これを退場させる具体的な道筋も見えない停滞した時代においては、未来志向の時間軸を信じきれない虚無的な想念が暗い運命論をまとうてさまざまに表現されることになる。18世紀末から1830年頃にかけて、ドイツ語圏の舞台では運命劇 *Schicksalsdrama* が流行する。一族にかけられた呪いのために、子殺しや親殺しの悲劇が繰り返される陰惨な恐怖劇。その代表作であり、1817年に出たグリルパルツァーの『先祖の女 *Die Ahnfrau*』には、自分ではそうと知らずに父を殺してしまった登場人物の言葉として次のようなものがある。

そう、意志は俺のものだが行為は運命のものだ。どれほど俺がもがこうとも泣こうとも、なにも運命の腕を押さえてはくれない。自分の意志のとおりになったなどと言えるやつがどこにいる。俺たちの行為は何も見えぬまま偶然の闇夜に投げられた骰子なのだ。<sup>16</sup>

ここでは目の前の悲慘が、未来に向かう前向きな時間軸の上に位置付けられるかわりに、ただ運命と偶然の無慈悲な仕業としてとらえられている。「歴史のぞっとするような運命論」についてのビューヒナーの言葉は、このような運命劇が流行する時代風潮の中ですでに様式化されていた慨嘆の継承でもあった。

同時に、彼は決して「運命論」の様式美に耽溺していたわけでもない。逆にこのおののきが手紙につづられた後にこそ、彼は革命活動を活発化させている。革命の歴史が告げる個人の無力さに動揺しながらも、彼は扇動ビラの作成に取り組み、『ヘッセンの急使』の草案を書き上げた。そしてそのモットーに、「あばら家に平和を、宮殿に戦争を」というフランス革命軍のスローガンをそのまま掲げたのである。『ヘッセンの急使』を書いた頃のビューヒナーは、革命に対するアンビバレントな緊張の只中であつた。およそ半年後に胎動した戯曲『ダントンの死』もまた、同じアンビバレントな緊張感に刻印されている。

## 6. 社会改革の夢と挫折——『ダントンの死』

『ダントンの死』は、社会改革を夢見た市民層知識人の挫折と失敗を描いた戯曲である。構想が始まったのは遅くとも1834年の秋。ビューヒナーが厳しい捜査を恐れて息をひそめていた時期である。10月に彼は、チエールの『フランス革命史』をはじめ作品の基礎となった文献をダルムシュタットの図書館で借りた。おそらく翌年1月中に書き始め、2月終わりには書き上げてグツコーに売り込み、その後すみやかに亡命を執行している。『ダントンの死』は、



亡命資金を得るためにわずか5週間で書かれたのだった。

短期間で集中的に書かれたこの短い戯曲には、変革を夢見る理想主義がみずみずしく表現されていると同時に、運命劇を思わせるニヒリスティックな色合いもまた色濃く滲み出ている。仲間や女性たちとの会話、そして裁判の場面を通して描かれてゆくのは、1794年3月28日から4月5日まで、ダントンとその仲間がロベスピエールらに告発され処刑されるまでの間である。特徴的なのは、ダントンもロベスピエールも、正反対の性格でありながら、ともに理想主義と虚無的な運命論を心のうちに同居させていることだ。ロベスピエールは、自らの正しさを確信しながらも、ともに戦ってきた仲間をギロチンに送るという事態に現実味を持ってない。「おれの中には他人がいる、そいつがなにを誤魔化してやがるのか、おれにはわからんのだ。」暗い窓辺にひとりたたずみ彼は次のように独白する。

目覚めているときおれたちは、明るい夢を見ているんじゃないのか。おれたちは夢遊病者なんじゃないか。現実の行為も夢の中のようなものだ、ただもっとはっきりと、座りがよく、きちんと進むというだけのことで。だからといって誰に責められる。(…) 罪は考えに宿る。考えが行為になるか、受肉されるか、それを決めるのは偶然だ。(34) <sup>17</sup>

夢遊病者的な相貌は、ロベスピエールに追い詰められる主人公ダントンにも共通している。ビューヒナーの描くダントンは、怠惰でつかみがないところがあると同時に、激烈な闘志をためらいなく表現もする、アンビバレントな革命家。ある夜、彼はロベスピエールと同じように一人窓辺にたたずむ。その口から、夜の夢想の中で心に浮かぶ言葉が我知らずほとぼしり出てしまい、聞きつけた妻になだめられても動揺がおさまらない。

夢だって？ああ俺は夢をみている、だがあれは違った。

(…)

いったいなんのつもりだあの言葉は？なんでよりによってあれだ、おれはどうすりゃいい。どういことだよ、血まみれの手をおれにのぼして。おれがやったんじゃない。

助けてくれジュリー、なんにも感じないんだ。あれは9月のことだった、ちがうかい、ジュリー。(49)

9月というのは、1792年9月に起こった大虐殺事件のことである。革命政府とオーストリアが戦争状態に入った緊張のさなかに、捕らえられた反革命派が外国と手を結ぶという噂が流れ、不安に煽られた民衆が牢獄を襲って約1200人の囚人らが殺された。当時ダントンは司法相で、彼の演説が事態のひきがねになったとも言われる。

(…)

やむをえない、まさに、やむをえないことだった。やむをえなさの呪いが落ちたその手を呪うやつがいるものか。だがやむをえぬと言ったのは誰だ、誰だ？姦淫し嘘を吐き盗み人を殺す、おれたちの中のこいつはいったい何者だ。

人形だな、おれたちは。見えない力に操られて。自分自身といえるものなんてどこにもありゃあしない。幽霊のふりまわす剣みたいなものだ、手だけがみえない、まるでおとぎ話の

中みたいに。(49)

流された大量の血はあまりにも取り返しのつかない現実で、そのために、手を下した者は下した事実の現実味を見失ってしまう。ビューヒナーが描くダントンは、ロベスピエールと同じように、行為とその結果の連関を見失い、原因と結果のつながりが弛緩した夢のような現実の中にいる。

より良い社会への理想を確かに追いながらも、流血と暴力にまみれた現在をその礎としてどうしても位置づけることができない——『ダントン』においては、そんな宙ぶりの緊張に追い詰められた心の飽和状態が、どこか夢遊病者の革命家の造形に表現されている。不確かに、夢遊病者のようにしか歩めない革命家たちの姿は、歴史的な事件の文学的表現として高いリアリティを持つと同時に、フランス革命というものに対するドイツ的なアンビバレントの一表現ともなっている。さらにそれは、政治的な熱と現実の冷たさに引き裂かれていた作者自身の生とも決して無関係ではなかったはずである。

## 終わりに

自由と平等の理想が高く掲げられる一方で、これとまったくそぐわない格差社会がまかりとおっていた近代化の過渡期において、農民や兵士といった存在は、理想と現実の落差を否応なく見せつける拡大鏡であった。こうした拡大鏡は、あえてのぞき込まない方が無難ではあるのだろう。落差を埋める道があまりにも遠いとき、落差を見つめてもおのれの無力さを思い知らされるだけで、敗残者になることが否応なく定まってしまうのだから。レンツとビューヒナーは、人間の自由な生という理想と、人が「機械」のようにあつかわれる現実との落差から、目をそらすことができなかった。敗残者の役回りを定められていた点で、二人は共通していた。

レンツにおいて、落差を埋めることができない無力さは、解決のための思考の不器用さを通して明るみに出ている。「軍人の結婚」のような論文の場合、そうした不器用さは社会理論としての不完全さを意味しているのかもしれない。しかし劇作品や小説の場合、うまく解決できていない不手際もまた、それによって無力さがより生々しく表現されるという意味を持つ。搾取構造の告発に見てとれる透徹した現状分析と、どうにもならない無力さの暴露が並存していることは、彼の作品の唯一無二の魅力ともなっている。

ビューヒナーの『ダントン』において、うまく落差を埋めることができない無力さは、より明確に、また意識的に詩的な表現の対象となっている。そこでは様式化された虚無的内面の詩的表現が断続的に使われ、理想主義的なものと虚無的なもの、歴史の事実と不穏な夢がたたみかけるようにつながられて、落差をじかに感じさせるようなつくりになっている。『ダントン』の後、ビューヒナーは『レンツ』や『ヴォイツェク』において、無力さに押し込められた人間の意識が狂気の世界に流れ出す、そのありさまの方に焦点を当ててゆくことになる。

レンツとビューヒナーは、ともに落差をのぞき込み、これを言葉の力で抉り出して乗り越える道を探った。そしてそれぞれに、挫折を否応なく突きつけられている。そうしたことは、レンツの狂気の、また常にゆるやかに狂気に開かれたビューヒナーの作品の、ひとつの背景であるだろう。時を隔てて生きたふたりのわずかな重なりが、社会的な批判意識ゆえに彼らがまとうことになった敗残者としての相貌にあったとするならば、ふたりをつなげるテキストにふさ

わしいのは、『レンツ』よりもむしろ『ダントン』なのである。

## 註

- 1 Johann Wolfgang Goethe: Aus meinem Leben; Dichtung und Wahrheit. (Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Bd. 14.) Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1986, S. 656.
- 2 ビューヒナーは1835年7月28日の家族への手紙の中で、自作の戯曲『ダントンの死』の「品の悪さ」を弁明して次のように書いている。「詩人は世界をあるがままにではなく、あるべき形で示さねばならないなんてまだ言うてくる人がいたら、僕は神様よりもうまくやろうとは思いません、と答えましょう。神様はきっと、世界をあるべき形にお作りになったんでしょうからね。」Georg Büchner: Schriften, Briefe, Dokumente. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 2015, S. 411. 短編『レンツ』では同様の言葉がレンツの芸術論として語られている。
- 3 Christoph Schmidt: Leibeigenschaft im Ostseeraum. Versuch einer Typologie. Wien(Böhlau) 1997, S. 60f.
- 4 少年時代のレンツについてはダムのレンツ伝が詳しい。Sigrid Damm: Vögel, die verkünden Land. Das Leben des Jakob Michael Reinhold Lenz. Frankfurt a. M.; Leipzig (Insel) 1992.
- 5 Jakob Michael Reinhold Lenz: Die Kleinen. In: Dramen, Dramatische Fragmente, Übersetzungen Shakespeares. (Werke und Briefe in Drei Bänden: Hrsg. von Sigrid Damm, Bd. 1.) Frankfurt a. M.; Leipzig (Insel) 2005, S. 474.
- 6 この文書はレンツがヴァイマルに持参した手稿に基づいて1913年にKarl Freyeによって初めて出版された。ただ、レンツはその後ヴァイマルの宮廷でも、さらにベルカに引きこもってからも「軍人の結婚」の書き直しを続けていた。この時に生まれた構想やメモはもとの手稿の10倍にのぼり、これを整理した版が詳細なコメントを付して二巻本で出版されている。Jakob Michael Reinhold Lenz: Schriften zur Sozialreform. Das Berkaer Projekt. Hrsg. von Elystan Griffiths und David Hill unter Mitwirkung von Heribert Tommek. Teil 1 u. Teil 2. Frankfurt a. M. (Peter Lang) 2007. 本稿では、Karl Freyeの版に基づくDammの全集版Jakob Michael Reinhold Lenz: Über die Soldatenehen. In: Lustspiele nach dem Plautus, Prosadichtungen, Theoretische Schriften. (Werke und Briefe in drei Bänden. Hrsg. von Sigrid Damm, 2. Band.) Frankfurt a. M.; Leipzig (Insel) 2005から引用して頁数のみを示す。
- 7 Vgl. Lenz: Schriften zur Sozialreform, a. a. O., Teil 2, S. 427f.
- 8 社会改善の提言を通してなんらかの地位を得ようとしたレンツの試みについて、詳しくは以下を参照。レンツの視野にはヴァイマル宮廷のみでなくフランスの宮廷も入っていた。Vgl. Lenz 2007, Teil 2, S. 429ff.
- 9 この社会改革案の先見性については以下を参照。Lenz 2005, S. 948.
- 10 こうした問題点はすでに指摘されている。Vgl. Daniel W. Wilson: „Zwischen Kritik und Affirmation. Militärphantasien und Geschlechterdisziplinierung bei J. M. R. Lenz.“ In: Unaufhörlich Lenz gelesen...“ Studien zu Leben und Werk von J. M. R. Lenz. Hrsg. von Inge Stephan und Hans-Gerd Winter. Stuttgart: Metzler 1995, S. 52-85.
- 11 ゲーテの『詩と真実』には、レンツの社会改革案がみな反対にあって燃やされたとあるが(Dichtung und Wahrheit, a. a. O., S. 654)、現在残っている手稿のほかに燃やされた原稿があったのかどうかは不明である。Vgl. Schriften zur Sozialreform, a. a. O., Teil 2, S. 419f.
- 12 ビューヒナーの手紙は以下から引用する。引用時に頁数のみを示す。Georg Büchner: Briefe von und an Georg Büchner. In: Schriften, Briefe, Dokumente. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 2015, S. 353-468.
- 13 テキストは以下を使用。引用時に頁数のみを示す。Georg Büchner: Der Hessische Landbote. In: Schriften, Briefe, Dokumente. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 2015, S. 53-66.
- 14 グツコーは、1830年代と40年代に政治的意識の強い「青年ドイツ」の作家たちの中心として活躍した人物である。ビューヒナーは戯曲『ダントンの死』を書き上げると、1835年2月彼に送って助力をあおいだ。グツコーはこの無名の若い作家による荒削りの歴史劇をきわめて高く評価し、これを『フェーニックス』誌に掲載する。さらにビューヒナーを鼓舞して翻訳の仕事を斡旋した。ビューヒナーは7月にはヴィクトル・ユゴーの『ルクレチア・ボルジア』と

『マリア・チュードル』の翻訳を仕上げて発表している。その後も、グツコーは自分の雑誌にビューヒナーの作品を掲載しようとするなど、彼の作家としての活躍を全面的に応援した。

15 ヴィクトル・ユゴー：『レ・ミゼラブル〈1〉』、岩波文庫、豊島与志雄訳、87頁/93頁。

16 Franz Grillparzer: Die Ahnfrau. Trauerspiel in fünf Aufzügen. In: Dramen 1817-1828. Hrsg. von Helmut Bachmaier. (Werke, Bd. 2.) Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1986, S.109.

17 テキストは以下を使用。引用は頁数のみを示す。Georg Büchner: Danton's Tod. In: Dichtungen. Hrsg. von Henri Poschmann unter Mitarbeit von Rosemarie Poschmann. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 2015, S. 353-468.なお、ビューヒナーの生涯や各作品の成立過程については、使用テキスト注釈や Roland Borgards; Harald Neumeyer (Hrsg.): Büchner-Handbuch:Leben, Werk, Wirkung. Stuttgart (J.B.Metzler) 2009などを参照。